

平成30年10月5日発行(毎月5日1回発行)
第58巻10月号(通巻711号)

風土



10

冷えきつて担かせ頂く柩かな

(句集『高蘆』より昭和四十四年作)

この句の「柩」は石田波郷の柩で、昭和四十四年十一月二十一日に五十六歳で亡くなりました。前書きに「波郷急逝、いまだ俳句の態なざる」とあります。この句の他にも「山茶花や椿を待たで波郷死す」、「通夜寒し波郷夫人を目に追ひて」があり、桂郎師の驚く様子が見てとれます。桂郎師は昭和十二年に波郷が「鶴」を立ちあげると同時に師事し、「風土」の主筆になってからもその高弟として活躍しました。「波郷死す」の報を受けた桂郎師は、七畳小屋を飛び出し、竹藪で号泣したと伝わっています。

みそさざい友を跨ぎて茶を淹るる

(句集『高蘆』より昭和四十四年作)

「みそさざい」は雀の仲間で全長十センチほどの小鳥です。普段は山の沢の近くですが、冬になると低地の下りてきます。七畳小屋の竹藪にもやってきたのでしょう。「みそさざい」の声を聴きつつ、「友を跨ぐ」とはぶしつけなど思っかもしれないが、「友」とは机替わりの炬燵のことです。炬燵は我れを温める友なのです。

顔一つ吹きのことさるる野分あと

(句集『幻』より平成七年作)

「野分」は草木をなびかせて吹く秋の暴風です。台風のことですが、ニュアンスとして雨よりも風をイメージします。古くから使われたことばで、『源氏物語』にも出てきます。さて、器師は野分後の「顔」に焦点を当て、「吹きのことさるる」としました。呆然とした自画像とも読めます。この頃は病に倒れた妻が長期入院していますので、取り残されたような感覚が「吹きのことさるる」につながったのかもしれない。

てんびんの撓ふ西瓜と一歳児

(句集『幻』より平成七年作)

この句は中国を旅した時のものです。現在の中国の経済発展からはほど遠い懐かしい世界です。向こうから、振り売りの「西瓜売」が籠を撓わせてやってきます。よく見ると後ろの籠には一歳ほどの子がおさまっているではありませんか。嬰兒をあやしながらの生業が当たり前であった時代が捉えられています。

若狭の蝗

南
う
み
を

木漏れ日の滝にうろこの如きもの

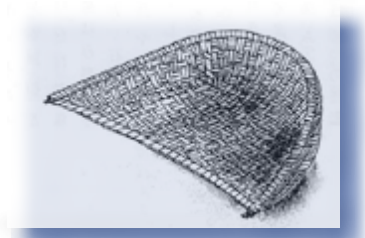
滝風におのづと両手ひろげをり

滝守の提げて供への生卵

冷麦のすすり音高く卒寿なる

鉾建ての地下足袋宙を行き交へる

鉾建ての一人ひたすら屑を掃く
まだ曳かぬ鉾の荒縄濃く匂ふ
ずりずりと畳につぶす夜の蟻
腰蚊遣右にひだりに畝作り
せせらぎの浸み入る寝莫塵巻きにけり
稲咲いて田を吹く風のゆるやかに
畦踏んで若狭の蝗弾きだす



竹間集

同人作品



原爆忌

高村令子

遺品みな語り部となる原爆忌
バス始動青葉の底に邑残し
戦争を知らぬ子ばかり八月来
両手ひろげ風となる児や夏木立
やさしさの嘘を通しぬ水中花
山国に民話の生きて天の川
花火咲く宇宙の闇をやはらげて

やませ来る

土井 三乙

やませ来るとどこかけものの臭して
餌時の鶏舎騒めく青やませ
百枚を一枚となす青田風
風鈴の好きな風来る格子窓
地下街や昼のカフェの水中花
手に囲ふ蛍の濡れてゐるやうな
川への途を走つた記憶草いきれ

空 蟬

林いづみ

引揚げの丘生れなり夏燕
手洗いひのハンカチーフに手アイロン
空蟬や目前にある一周忌
新じやがの畑に園児のこ糸湧きぬ
日日博暑入浴剤を森の香に
京扇子うすむらさきの刺繍あり
茄子焼きて金婚近き日のふたり

門前町

小林 共代

水打つて埃の上がる門前町
おみくじの恋は大吉白日傘
七月の影を踏みゆく阿弥陀堂へ
文机に載せ経典のお風入
百僧の正しき所作の大施餓鬼
一村の大事な泉汲みにけり
馬の背を分けてゆくほどの大夕立

天牛

中根 美保

道おしへまた振り返る苔の道
天牛や髭の大鋸屑振り歩む
天牛の飛翔短き桑 畠
金色の卵も濡らし子負虫
揚羽蝶大揺れの枝に近づけず
少年は母の背を越し捕虫網
空蟬の位置定まれる机かな

一周年

間島あきら

日々大事生きるが大事吊忍
手の自在指の自在や獺祭忌
目の端に動くものあり夜の蜘蛛
みんみの尻立てて鳴く力かな
涼しかりランプを吊す山の茶屋
西行の二度越す峠落とし文
器忌や継がれし「風土」一周年

涼し

内藤 静

良弁の滝とは竜の吐きだせる
涼しさは一調を追ふ葉擦れかな
冥界へ退くシテの薄衣
酔の匂ひして厨こそ涼しけれ
飯粒を指鼻よりはがす溽暑かな
蜘蛛の巣の芯にたたかふ蜘蛛と蜂
河童忌の河童はわらふ泣きながら

山河集

同人作品



南うみを選

蟬の空樹々の波打ちゐる高さ
和紙に描くランプシェードや灯涼し
天井にむささびの棲む夏山家
高原の馬柵どこまでも雲の峰
乾杯に今宵は江戸の切子とす

落合 絹代

蟬の穴探りて闇の深からず
炎天の川の昏みを覗き込む
蝶羽化のごと烏瓜の花ひらく
火星近づく空の一点広島忌
夏帽子掛けしままなり夫の留守

平田きみこ

潮の香のふかまる浜や夏の果
笛の音の闇に吸はるる寺涼し
大西日富士一切の影もたず

片桐紀美子

空に燃ゆいま日の辻の百日紅
玫瑰や終着駅の海の青

高橋まき子

一足も容れぬ草地や夏蓬
境内に葭簀の舞台整ひぬ
江ノ電や隣に座るパナマ帽
クリスティーの本に香水染む栞
三分の二までがんばるかき氷
紀の国の青柿すでに角を持つ
地下街に吸はるる祇園囃子かな
入れてより震へどほしやたもの鮎
蘆原にぬつと出てくる鮎の竿
夏の月背もたれ少しずらしけり

池田 光子

風土独語／南 うみを



蟬の空樹々の波打ちぬる高さ

落合 絹代

この句は、蟬が木々を飛び交い激しく鳴いている様を「蟬の空」と表現し、それを受け止めている木々たちを「波打ちぬる」と置きました。木々と蟬の「いのちの交感」が作者の五感でしっかりと捉えられています。器師の「いのち二つ」とはこのことです。

祭笛 闇を豊かに薫らしぬ

岡本 尚子

作者は今、遠くの「祭笛」を闇を介して聴いています。日頃の闇が笛の音色で「祭の闇」に満たされていくのを感じているのです。「豊かに薫らしぬ」で「祭の闇」を見事に表現しました。

蝶羽化のごと烏瓜の花ひらく

平田きみこ

この句は直喩表現で、「蝶の羽化」と「烏瓜の花」のイメージを重ねました。安易な喩は禁物ですが、「蝶の羽化」は適切な喩です。私たちは白い蝶が翅を広げる様子を想い浮かべながら、烏瓜の真っ白な花が闇にリースを広げる姿を重ねるのです。妖艶な世界が現れました。

七夕や願ひに倦みて竹撓ふ

片桐紀美子

七夕の竹にたくさんさんの願ひ事の短冊が撓うほどに吊られています。人間の側のような想いの現れとして「撓う」と発想するのが普通ですが、作者は竹に感情移入して「倦みて竹撓ふ」と置いています。人間の身勝手な想いをチクリと刺しています。

釈出でて涼しき距離に円覚寺

石井 秀一

「円覚寺」は鎌倉五山のひとつで、無学祖元開山の禅寺です。その落ち着いたたずまいに、人々はやすらぎを覚えます。作者は駅からほどよい距離で「やすらぎの世界」に包まれました。それを「涼しき距離」と感じたのです。「心の涼しさ」です。

三分の二までがんばるかき氷

高橋まき子

「かき氷」は夏の代表的な水菓です。暑さで火照った身体を冷やすにはもってこいです。しかし口の中がだんだん冷たくなり、頭もキンキンとしてきます。全部は無理。なんとか頑張って、「三分の二」までたどり着きました。「三分の二」がリアルです。

紀の国の青柿すでに角を持つ

池田 光子

「紀の国」は蜜柑や梅とともに柿の産地です。散策の途中でしよるか。柿畑には青柿が姿を見せています。その青柿を見入り、「すでに角を持つ」と言い止めました。これは富有柿です。大きな四角の富有柿の姿が青柿にしてすでに出来上がっているのです。

風土集



南うみを選

触れ太鼓遠く近くに日の盛

相模原

岡本 尚子

神降ろす笛や太鼓や夕立来る

(まよひ)

農協の助つ人集団村神輿

星空へ神輿戻りし鬨の声

祭笛闇を豊かに薫らしぬ

七夕や願ひに倦みて竹撓ふ

平塚

片桐紀美子

伊那谷の風まだ重き青りんご

蜘蛛の囀をひからせ夕日海に入る

川音のにはかに戻り昼寝覚

疲れ目に影の大きく黒揚羽

鬼の一字碑文ありて木下闇

神奈川

石井 秀一

短夜や蛇口の雫落ちる音

噴水の止まりし後のしじまかな

駅出でて涼しき距離に円覚寺

蟬時雨親しき人の訃報きく

灯の船となりて出てゆく澆涼し

大和

落合 絹代

筆に偲ぶ師の大硯洗ひけり

野外演奏曲の合間の風涼し

ブルーベリー摘む兜虫探す子と

喪服の背正し踏み出す炎天下

帰省子の染髪にして寡黙なる

水戸

山田 健太

老犬の主に遅るる暑さかな

気休めに草引いて妻出勤す

手花 火や腕 肘 鉄 膝 頭

校庭を吹き抜けてゆく青田風

蟬の声まつすぐ立てる古墳群

福生

雨宮 桂子

赤松はちちははのごとかなかな

あづみの雨だれひとつ稲の花

青林檎てんでに背伸びしてゐたる

睡蓮のあつめて白き風ばかり